

冒険遊び場のプレーリーダーの関与志向性と子どもの遊びとの関係性 ～プレーリーダーの関与志向性と子どもの遊びとの相互関連性に着目して～

○石井 正邦
(兵庫教育大学大学院)

嶋崎 博嗣
(兵庫教育大学)

【問題と目的】

近年、幼少年期子どもの遊びを保障することの重要性が指摘されている。このような状況の中、「冒険遊び場」では、大人が「プレーリーダー」という立場で遊びを援助している。それぞれの遊び場で多種多様な活動を展開しているが、各所「自分の責任で自由に遊ぶ」という理念を掲げ、子どもが自らの意志で存分に遊びを展開出来るように環境設定を行っている。また、大人は子どもが低年齢であるほど過度に関与してしまいがちであるが、冒険遊び場では大人が必要以上に遊びに介入しないという姿勢を重視している。さらに、保護者や地域の大人にも、子どもの遊びについての理解を促す取り組みを行っている。

以上のような冒険遊び場は、2002年度からの完全学校週5日制導入後の地域社会における子どもの受け皿として、さらには、日常生活において出来にくくなった多様な遊びを保障する場としての機能を果たすことが期待されている。

本研究では、プレーリーダーの関わり方が、冒険遊び場の子どもの遊びにどのように反映するかについて、その相互関連性を検討する。具体的には、プレーリーダーが子どもの遊びの現状をどのように認識しているのか、また、子どもの遊びに対してどのような関与志向性(どのような援助を意識しつつ子どもの遊びに対峙するかという「大人が子どもの遊びに関与(援助)する際の意識」)を有しているのか、さらにそれが子どもの遊びの姿勢や展開状況にどのように反映するかについて、相互の関連性を明らかにすることである。

【方法】

1. 調査対象

全国133箇所の冒険遊び場のプレーリーダーを対象に調査を実施した。回収に応じてくれた冒険遊び場は67箇所であり全体の50.3%であった。なお、質問紙は788部配布したうち、229部回収した。

2. 調査期間

2003年4月7日(月)～4月25日(金)。

3. 調査手続き

調査は質問紙法を用いて行った。NPO法人「日本冒険

遊び場づくり協会」に調査の依頼を行い、承諾を得た後、各冒険遊び場の代表者宛てに質問紙を郵送した。そして回答後、回答者全員分の質問紙を一括して返送するように依頼した。なお、質問紙は全て無記名自記式とした。

4. 調査内容と尺度の検討

①子どもの遊びに対する現状認識について

先行研究などを参考に、今日問題視されている子どもの遊びの現状に関する合計15項目の尺度を作成した。

質問項目は、「遊び意欲」、「遊び環境」、「遊び集団」の3つの側面から内容を構成した。そして、「大いにそう感じる」、「そう感じる」、「あまりそう感じない」、「そう感じない」の4段階評定(4～1点)で回答を求めた。

②関与志向性について

先行研究などを参考に、大人(本研究ではプレーリーダー)が子どもの遊びを支援・援助する際の視点に関する合計25項目の尺度を作成した。

質問項目は、「社会性の発達」、「環境構成・整備」、「主体性の尊重」、「遊びの発展」、「遊び集団の拡大」の5つの側面から内容を構成した。そして、「大いに当てはまる」、「当てはまる」、「どちらでもない」、「あまり当てはまらない」、「当てはまらない」の5段階評定(5～1点)で回答を求めた。

③子どもの遊びの様子(積極的姿勢)について

先行研究などを参考に、冒険遊び場における子どもの遊びの様子(積極的姿勢)に関する合計16項目の尺度を作成した。

質問項目は、「遊びの多様性」、「仲間との交流」、「遊びの情報伝達」、「遊びの方法選択」の4つの側面から内容を構成した。そして「大いに当てはまる」、「当てはまる」、「少し当てはまる」、「当てはまらない」の4段階評定(4～1点)で回答を求めた。

なお、本研究で用いた尺度の因子分析および信頼性分析の結果は、以下の通りである。

尺度	項目数	第1因子固有値	寄与率 (回転後の因子数)	信頼性 係数 α
遊びに対する現状認識	11	4.439	49.983(3)	0.850
関与志向性	19	6.420	55.159(5)	0.880
子どもの遊びの様子	15	6.110	53.501(4)	0.890

(Varimax法による回転)

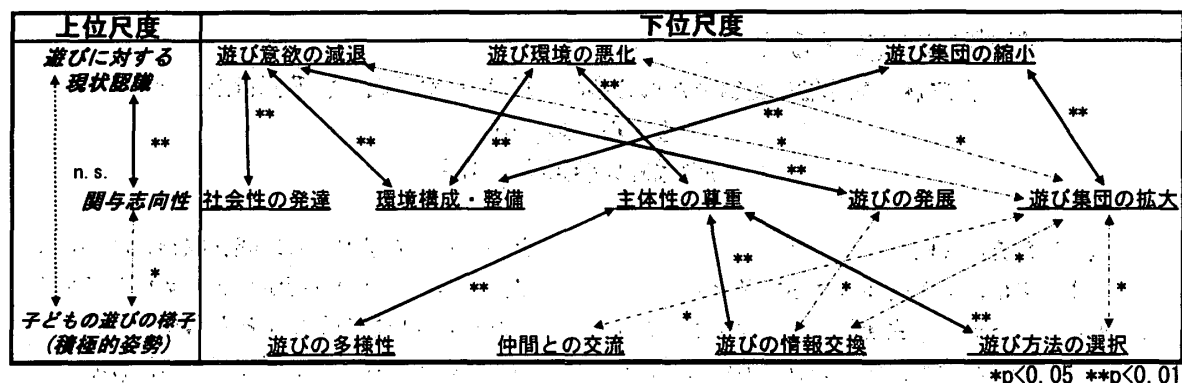


図1 相互関連性全体図

【結果と考察】

図1は、①～③の尺度全体の相関分析結果と下位尺度間の相互関連性を示したものである。以下の考察は、それに基づいて行った。

1. 遊びに対する現状認識と関与志向性との相互関連性

プレーリーダーの遊びに対する現状認識と関与志向性との相互関連性を検討するため、相関分析を行い、Pearsonの積率相関係数を算出した。

その結果、図1に示したように、プレーリーダーの遊びに対する現状認識と関与志向性との間、および、下位尺度間には有意な相関が認められた。

以上のことから、子どもの遊びの現状を否定的に認識しているプレーリーダーは、子どもの遊びに関与しようとする意識が高いことが明らかになった。また、下位尺度間に着目すると、プレーリーダーは遊びの環境の構成や整備に力を入れ、子ども同士の相互交流を活性化させるような関与を志向していることが明らかになった。

2. 関与志向性と子どもの遊びの様子(積極的姿勢)との相互関連性

プレーリーダーの関与志向性と子どもの遊びの様子(積極的姿勢)との相互関連性を検討するため、相関分析を行い、Pearsonの積率相関係数を算出した。

その結果、図1に示したように、プレーリーダーの関与志向性と子どもの遊びの様子(積極的姿勢)との間、および、下位尺度間には有意な相関が認められた。

以上のように、プレーリーダーの関与志向性の高さは、冒険遊び場で子どもが積極的な姿勢で遊びを展開していることに関連があることが明らかになった。つまり、プレーリーダーの子どもの遊びに対する関与には、子どもの遊びを活性化させる可能性が内包されていることが推察される。

また、関与志向性の中でも特に、子どもの主体性を尊重しようとする「主体性の尊重」が遊びの样子の多様な側面に相関を示しており、子どもの主体性を尊重する意

識が高いプレーリーダーが存在する冒険遊び場では、子どもがより多様な遊びを展開し、活発に仲間と交流しながら遊んでいたりと、遊びに関する情報を伝え合ったりしていることが明らかになった。さらに、遊びの中で方法の選択を活発に行っていることが明らかになった。

【まとめ】

本研究では、プレーリーダーの関与志向性と子どもの遊びとの相互関連性に着目し、検討した。

では、冒険遊び場において子どもの遊びの姿勢や展開状況の多様な側面に相関が認められたプレーリーダーの関与志向性である「主体性の尊重」は、現代社会において子どもの遊びに欠落している何を保障し、提供出来るのであろうか。それは、自立的な課題解決能力を獲得する過程の提供と、保障であると考えられる。

現代社会において、子どもは様々な制約(公共の遊び場の禁止事項や「3間」の縮小 etc)や企業による一方的な商品化された遊具の提供により、外部の意図によって遊ばされていると言っても過言ではない。それに対し、冒険遊び場において子どもは、大人から干渉はされないが、遊びを与えられることもない。また、子どもは遊ぶ上での危険を回避したり、失敗したりという不快な体験を自ら引き受けることもしなければならない。そのため、冒険遊び場において子どもは、遊びの中で衝突する障壁を自立的に克服していくことが要求されるのである。

以上のように、プレーリーダーの「主体性の尊重」を志向した関与は、大人の側からの過度の遊びへの介入を回避し、日常生活では出来にくくなった多様な遊びや遊びにおける試行錯誤、仲間との交流の保障へと繋がったものと考えられる。そして、子どもが遊ぶ上での障害が存在する現代社会において、プレーリーダーの関与は、「自分の責任で自由に遊ぶ」という理念を掲げ、子どもの遊びの自由度を最大限に尊重した冒険遊び場という場の特徴と相互循環的に子どもの自立的な成長に寄与している実態が見出されたと言える。